

都市の窓

朱雀・白樫集より

木々芽吹き短編のごと逝きし人
北国の雪夜にまばら町あかり
信号の照らす軌条や冬の雨
幹入の葉効きたる芽吹かな

青桐集より

オルセーも来たりし街に春の雪
卒業子皆短髪のVサイン
楽茶碗縁の光のあたたかし
啓蟄や癒えし耳より物の音
一隅を空けてあかるき蝌蚪の紐
薄氷のゆるぶ頃合ひ鳥の数

三森 梢

中島 晴生

秋澤 夏斗

永井 詩

臼井 走

横山 千砂

高橋 芳

長岡 あゆ

盛田 恵未

下村あや香

都市集より

初日さす近江の海は繻子のごと	角田
先に目をそらしゆく君梅の道	山路
初仕事白衣の襟を正しけり	打木
筑波山見つけし声や昼霞	島田
節分会憑依の鬼に泣く子かな	嶋田
ぎうぎうと流水騒ぐ旅寝かな	丹野
薄水に刺して餌を採る鷺の嘴	井手あやし
春の月二軒目探す神楽坂	鈴木ちひろ
春禽の山と山とを繋ぎけり	吉良
ラガーまづ土竜の穴を踏み固む	千葉
	水路 <small>みづぢ</small>
	唯

都市の窓

朱雀・白樫集より

口紅をつける男や近松忌
眼から貌の浮かばぬマスクかな
夜神楽の影もまた舞ふ大広間
さつきよりつまりつまりとおでんかな

青桐集より

家出せし犬戻り来る冬田かな
小春日や賽銭箱を塞ぐ猫
餅間の厚切パンに濃きバター
百年を生き切りし叔母足袋に継
餅焼けて小さな富士の噴火かな
晩年の母の顔あり初鏡

安藤 風林

岩原 真咲

中島 晴生

大木 満里

井手あやし

打木 歩人

白井 走

林 わか

嶋田 正次

田中 聖羅

都市集より

初乗のライダーそろふラーメン屋	山路
日直の「札」の号令息白し	角田 球
針箱の待ち針踊り春支度	木村 風子
万引を見しかも知れぬそぞろ寒	茂呂詩江奈
残る蚊の一刺し赤き台地腫れ	ゆたか一空
山茶花の家はこどもの一〇番	長岡 あゆ
音の粒弾くジャズバー冬の夜	岡 葵
寒鯉を握りて五指のみな動く	落合 秀岳
寒牡丹見知らぬ人と褒め合へり	小林 由寿
妻笑ふなら道化役にも冬うらら	石原 海人 <small>かいと</small>

都市の窓

朱雀・白樫集

赤い羽根目が合ふ生徒から買ひぬ

安藤 風林

爽やかや朝餉の卓に紀寿の花

星野 佐紀

青桐集

松手入迷はぬ音の続きをり

砂金 明

星飛ぶやワイングラスの手暗がり

永井 詩

森の扉を叩くが如き木の葉かな

大木 満里

甲斐犬の手綱に打たれ朴落葉

大矢知順子

川釣の子と乗合はす墓参り

林 わか

大櫓庭隅々を落葉して

高橋 芳

朴落葉吾の靴置きて比べ見る

甲光 あや

都市集

葬儀屋の目につく町や日の盛	ゆたか一空
電柱の真葛の塔となりけり	打木 歩人
草の実の世にも小さき神に会ひ	角田 球
背の丸き工員の列銀杏散る	山路 泉 <small>いづみ</small>
オーロラの如くに動く稲雀	井手あやし
一座一座著き稜線雁渡し	高橋 芳
大空に体育の日の日章旗	嶋田 正次
裏道は勘に任せて酔芙蓉	盛田 恵未
鉄骨の立つや次々鳥渡る	菅野 れい
林檎手に過ぎ去りし日の吾子の顔	高橋すみれ

都市の窓

朱雀・白樫集

それなりの仲やチーズの青き黴
旅なれば手をつなぐ夫秋の暮
提灯が熟れて厄日の夜の市

青桐集

一瞬に息を合はする鷓と鷓匠
秋暑し葉はちりちりと光はね
抽斗の空気出てくる炎暑かな
手を合はすうしろ涼気の過ぎにけり
盆過ぎや湯舟ぬるめに足伸ばし
岩肌は地球の面つらよ滴れる
涼風の夕暮野辺に吾を誘ふ

桜木 七海

坂本 遊美

本多 燐

盛田 恵未

林 わか

吉良 唯

砂金 明

田中 聖羅

永井 詩

酒匂 了太

都市集

切岸の熱さめやらで置く鶉籠	山本 恵夢 ^{めぐむ}
夜濯や未だ眠りにつかぬ街	角田 球
夏木立鳥は誰かに話しかけ	島田 遊妹
落鮎の背にあかるき光かな	井手あやし
赤とんぼ日差は水に浮くやうに	大木 満里
朝焼や神も原色好むらし	茂呂詩江奈
蜻蛉の波打つて飛ぶ川面かな	平澤ひなこ
土手に座し花火の雫降るごとし	長岡 あゆ
茶も能もうときわれなり太閤忌	山路 泉 ^{いずみ}
娘の残す風鈴鳴りてひとり酒	丸山 斐霞

都市の窓

朱雀・白樫集

同僚は大方黄泉や浮いてこい

郭公や遺跡に仰ぐ津軽富士

木遣一声激流わたる御柱

山百合の群生威香放ちけり

青桐集

向かうから同級生か青田道

新緑よビタミン色の服着たく

雨清々白また白の百合の花

抽斗に家族の匂ひ雲母虫

白松はくしょうの幹の七色梅雨はじめ

紙魚に食はれし啄木と十五の吾

安藤 風林

三森 梢

川合 岳童

中島 晴生

井手あやし

永井 詩

高橋 芳

吉良 唯

平澤ひなこ

外山 糖子

都市集

給水のりヤカー続く神輿かな	鈴木ちひろ
くぐる湯にのぼるさみどり新若布	山本 恵夢
外来の途切れて窓の若葉かな	打木 歩人
縞蜥蜴背なの光の跳ねにけり	ゆたか一空
最強は平常心や立葵	山路 泉
腹筋の見ゆる夏服目の合うて	山中あるく
手に取れば力湧き出で蠅叩	嶋田 正次
風死せりミラーに映る闇の街	臼井 走
漱石に学びし生や書を曝す	丹野 遊
ソプラノとアルトの二輪アマリリス	須田 楓

都市の窓

朱雀・白樫集

爺が子と花札遊び花の下

安藤 風林

神馬にも勤務時間や扇風機

星野 佐紀

今年また同じ桜に西行忌

中島 晴生

光る瀬は鳥の漁り場つくしんぼ

高橋 亘

卒業の娘母より大人びて

秋澤 夏斗

青桐集

囀やガイドの背には三鱗

永井 詩

単線の車掌の憩ふ花の駅

鈴木ちひろ

子の握る木の皮厚き立夏かな

平澤ひなこ

電卓を打ちながら聞く春の雷

井手あやし

杉の花ひとかたまりに風がゆく

田中 聖羅

都市集

こんなにも静かな世界揚雲雀	打木 歩人
心臓にひびく一輪椿落つ	ゆたか一空
夕桜われに珠玉の余生かな	落合 秀岳
吊橋の足の下より初音かな	嶋田 正次
野遊びやドレミの歌が止まらない	角田 球
姫螢迷ひこむ夜の一周忌	川合 岳童
秤目に遊びが少し白子干し	本多 燐
啓蟄や車内に土の匂ふ人	岩崎 曜
スイトピー拳式まぢかの友の部屋	山路 泉
祭太鼓若き二の腕撥のごと	岡 葵

都市の窓

朱雀・白樫集

紅椿羽ばたくやうに頁開き

北杜 青

椿鳴くやうに隠れて鳥の声

高橋 亘

松風の素襖を透かす能始

本多 燐

青桐集

あたたかや亀の時間にひき込まれ

島田 遊妹

正月は朝日主役となる時ぞ

長谷川 積

空一枚めぐりたくなる余寒かな

大木 満里

隣家より月が綺麗と初電話

永井 詩

保育器の小さき鼓動や山笑ふ

丸山 斐霞

春寒や妻の炊事にある怒り

落合 秀岳

掬ふたび少し零るる白子干

井手あやし

都市集

大阿蘇の野焼よ大地舐むる火よ	卒業や瘡蓋 <small>かさぶた</small> はまだ残りをり	春節の街や押し合ふ地下通路	小流れの苔の雫に春日かな	革靴を磨けば春の光さす	存 <small>まご</small> へてまた今生の花見酒	冬の雨一人に灯す保育園	ピアノ去りぽかんと白き壁に春	骨接ぎの足を湯まかせ竹の秋	首伸ばす麒麟の上の古巢かな
下村あや香	岩崎 曜	吉良 唯	長岡 あゆ	ゆたか一空	川合 岳童	砂金 明	山路 泉	丹野 遊	須田 楓

都市の窓

朱雀・白樫集

冬の蠅つまむが始め窓掃除
冬晴に汐風仄と天守閣
寒泳の列なす抜手揃ひけり
日没の金の水輪に鴉一羽

青桐集

川涸るや日溜りにある氾濫碑
子に非ず我に落度か落葉踏む
池尻に名残のひかる初氷
天狼や死せし男は詩を残し
友よまだ寒い地球に俺はゐる
お囃子に枯葉散るちる里神楽
花喰ひに鶉一番の御慶かな

岩原 真咲

中島 晴生

坂本 遊美

秋澤 夏斗

大木 満里

永井 詩

樋口 冬青

高橋 芳

井手あやし

鈴木ちひろ

吉良 唯

家寒し妻が不在といふだけで
袖子買ってまだ入浴は許されず
都市集

獅子舞はわが禿頭も囃みにけり
おさがりのセーター着れば子のにほひ
好物の汁粉振舞ひ初稽古
鳩は眼に光湛へて浮きにけり
横に伸び銀の冬波金の海
ストーブや窓越しの灯は濡れてをり
水仙や日差しも風もこまごまと
身の肥えて翅の小さき冬の蠅
霜だたみなにもなき野を飾りけり
除夜の鐘とうに百八超えたはず

落合 秀岳
田中 聖羅

鳴田 正次
林 わか
木村 風子
打木 歩人
砂金 明
山路 泉
本多 燐
平澤 ひなこ
橋本 うらら
大林 宇南

都市の窓

朱雀・白樫集

竹伐りの姿は見えぬ竹騒ぐ

バンダナの男ら作るきのこ飯

鉄くろがねの穂高山塊星月夜

つつ抜けに遠峰光りぬ葡萄棚

青桐集

大幹たいかんに蜘蛛の卵囊らんのかう秋の暮

しばらくは日差に凭れ石露の花

秋灯氏神さまと暮らす日々

秋雨や星座のごとき盆地の灯

記紀の代も同じ山並鳥渡る

甲斐人の墓標は富士よ秋の風

枝豆の指を吸ひつつ酒一献

森 有也

安藤 風林

川合 岳童

北杜 青

平澤ひなこ

大木 満里

砂金 明

秋澤 夏斗

落合 秀岳

外山 糖子

大矢知順子

療法士の膚の湿りや秋暑し
叢雲の平らに去りて秋の空
都市集

田中 聖羅
樋口 冬青

露草や更地になりし家の鍵

角田 球

鬼胡桃土偶の乳房二つまみ

本多 燐

襟足にバリカンの熱冬に入る

山地 泉せん

秋の蚊の納豆に脚取られをり

ゆたか一空

商店街桃のこれぞと香りけり

長谷川 積

芋虫の白きはだえ膚の悶えかな

打木 歩人

月明に宛名確かめ投函す

三遊亭らん丈

時代祭コンクリートに馬匂ふ

岡 葵

はからずも同じ日生まれ天の川

茂呂詩江奈

眉を引く鏡の中に花アロエ

小林 由寿

都市の窓

朱雀・白樫集

あぶれ蚊の昼を鳴きつく自決壕
ダリア大輪切れば零るる陽の炎
手の甲をぢりと突きさす秋日かな
無患子の音ふたいろに落ちにけり

青桐集

子供らの困む地獄絵夏座敷
ゴールデン街の論戦明易し
かき水財布の小銭ばらまいて
受付に眉濃き女信長忌
正論にパセリ細かく刻みけり
帰る子に自慢のトマトもう一つ
麻衣皺も着こなす義兄かな

桜木 七海

森 有也

三森 梢

北杜 青

永井 詩

秋澤 夏斗

大木 満里

本多 燐

砂金 明

林 わか

盛田 恵未

滝壺へ刃物のごとく水撈ふ
夏木立出できしときは別人に
打水の知らせやビルの放送に
都市集

島田 遊妹
三遊亭らん丈
井手あやし

大道芸の演者は日向夏木立
独り居や夜景肴に新酒酌む
作業場の埃鎮もり夜食来る
雑踏や街丸ごとの蒸暑さ
稲の香の満ち満ちてゐる湯宿かな
駆け込んで車内見渡す休暇明け
式典の顔みな違ひ原爆忌
牽牛花狎の顔して並びけり
赴任地はヒンドウの国星月夜
だんまりのカフェのカップル灯に入る蛾

山中あるく
角田 球
金 いがん
打木 歩人
樋口 冬青
田代 わこ
高橋すみれ
窪田 深月
丹野 遊
山路 泉

都市の窓

朱雀・白檜集

水馬の追うて追はれて群のうち

森 有也

六月の光へ跳ねて鯉黒し

三森 梢

雪溪を登り詰めたる花浄土

川合 岳童

手術後の覚めてこの世の扇風機

高橋 亘

青桐集

鮎届く川の匂ひも漂はせ

宇津木 江

緑蔭に湯浴みのごとく坐り进行

大木 満里

色といふ色が売られて浮人形

本多 燐

飯食べてひとつ強むる扇風機

井手あやし

唐十郎逝去せりこの修司忌に

田中 聖羅

一斉にレースヨットの滑り出し

長谷川 積

牛拗ねて牛車牽かぬも賀茂祭

嶋田 正次

都市集

向日葵や素顔の吾はいくぢなし	外山 糖子
夏帽子直木 <small>すぐき</small> の森に身を伸ばし	永井 詩
割勘に勝ち負けありてピアホール	金 いがん
空港やコイン残りてレモン水	高橋 芳
亡き夫の時計止まらず合歓の花	角田 球
ティッシュ引くやうに解 <small>ほぐ</small> るる牡丹かな	平澤ひなこ
玉虫に心残してバスに乗る	下村あや香
手に残る父の微熱や五月闇	岩崎 曜
新樹光ゴール下なる水たまり	砂金 明
ビー玉のあぶくの光る薄暑かな	山路 泉 <small>せん</small>

都市の窓

朱雀・白樫集

朝寝して安房の明るさ楽しまむ
親類が来たやう軒のつばくらめ
若き駅に若き桜の並木かな
山茱萸や頬にぴりりと朝の風

青桐集

金婚や汝なにたんぼぼの金メダル
B 出口の空や都心の鳥の恋
土手の花見えて郷里の駅間近
出前機の花屑付けて並びをり
春の雨作業服にて母の通夜
マニラてふ食堂暗く鳥雲に
飛花落花波の光に吞まれけり

桜木 七海

安藤 風林

岩原 真咲

星野 佐紀

秋澤 夏斗

吉良 唯

高橋 芳

小寺 檸檬

宇津木 江

井手あやし

嶋田 正次

大鶴のジャンプや花芽啄みぬ
花冷や身体からだ中から声出す子
事故処理の終はる街角燕来る
都市集

鶯笛 買ふや私の囁りに
山焼の余熱足裏に野を下る
春よ春神々息を吹き遊び
繰り返す遅延の知らせ花の駅
春の陽や暗渠の顔を出すところ
修司忌や同じ時代を経し友と
花楓鳴き真似うまき飼育員
老鶯の何故か外るる末の音
摺り足の能体験や麗けし
朧夜の亡妻まと子供の話など

平澤ひなこ
島田 遊妹
樋口 冬青

大矢知順子
中島 晴生
永井 詩
鈴木ちひろ
打木 歩人
角田 球
山中あるく
菅野 れい
横山 千砂
嶋田 正次

都市の窓

朱雀・白樫集

寒の水女杜氏は紅ささず

森 有也

寒鴉路上の歌手に寄りて鳴く

安藤 風林

鉄瓶の湯気に影ある寒さかな

中島 晴生

青桐集

初夢に笑みをこぼしてゐたやうな

大木 満里

五感より第六感や亀の鳴く

砂金 明

月影の崩れて鴨の一羽二羽

秋澤 夏斗

卒業す林野育む者として

上原 いと

病みついて髪の毛の匂ひや久女の忌

外山 糖子

ほめらるる夢から覚めて春の昼

三遊亭らん丈

旅信書く幸せと書く花の宿

竹生田 棗

都市集

孟浩然また唱へては朝寝かな

金 いがん

富士壺は漁網の花や春の波

盛田 恵未

抱きし児の頬の産毛よ風光る

宇津木 江

バーの扉を開きてバレンタインの夜

ゆたか 一空

角打やコート袖の触れあへる

岩原 真咲

湯気上ぐる裸男や春祭

土屋 良夫

十二月電飾映し都バス過ぐ

長谷川 積

風吹くな白き辛夷の傷つくな

丸山 桃

春の鶉かしぎし樋に水浴びて

山中あるく

都市の窓

朱雀・白樫より

銀杏落葉うつむく頬を明るうす
温突オンドルのことしみじみと老いし夫
一茶忌の白皚皚と北信濃

青桐集より

電工の冬青空を職場とし
落葉よ落葉何故急ぐ母の逝く
駅前駅前に楽器集まるクリスマス
ベンチとは冬暖き響きかな
マネキンの眠らぬ店や夜半の冬
白鳥の飛翔の腹に朝日かな

森 有也

岩原 真咲

川合 岳童

砂金 明

横山 千砂

吉良 唯

本多 燐

臼井 走

平澤ひなこ

都市集より

音は海へとニューイヤークンサート	小寺 檸檬
冬晴の空に麒麟の咀嚼かな	小林たまご
冬の夜や辿り読みする子の眉根	下村あや香
枯野ゆく川の蛇行や遠筑波	打木 歩人
寒月や父からはずす細き命 <small>めい</small>	土屋 良夫
百歳 <small>ももとせ</small> の冬木の中を息深く	角田 球
息白し出陣のごと闇に出づ	金 いがん
初明り夜勤は無事と娘より	外山 糖子
枯芒旅に過ごせる日々も老ゆ	落合 秀岳
毛糸帽かぶり厨の修行僧	小林 由寿

都市の窓

白樫集・青桐集

星飛ぶや文字なき民の恋の歌
 競ふこと忘れて久し種牡^し馬^ぼ肥ゆ
 栗茸を詰めて袋の曇りをり
 秋風や燦燦と過ぐ五十代
 結局は同じセータ―選ぶ父
 中秋無月地は一面の街灯り
 訪ふ人のなき昼下がりに小鳥来る
 ふつと母生を手放し星月夜
 秋うらら車掌の英語なめらかに
 実物は小さき仏文化の日

都市集

稲刈に加はらぬ子の捕虫網
 地下街にも路地裏があり新酒汲む
 鈴虫と同じもの食ひ早寝せり
 乗り過ごし歩いて帰る柿日和
 吾が拠点作るがごとく炬燵置く
 コンビニの袋を下げて良夜かな
 蟪蛄の風になるまで吹かれをり
 吾亦紅一輪差して野をここに
 月天心姉の手そつと握りけり
 新米の湯気も光るや玉子焼

三森 梢
 中島 晴生
 北杜 青
 加瀬みづき
 三遊亭らん丈
 高橋 亘
 田中 聖羅
 永井 詩
 大木 満里
 小寺 檸檬
 井手あやし
 本多 燐
 小林たまご
 嶋田 正次
 土屋 良夫
 小林 由寿
 上原 いと
 宇津木 江
 外山 糖子
 高橋すみれ